

キーツの墓碑銘再考

山 本 由美子

On Keats's Epitaph

YAMAMOTO Yumiko

Abstract

On February 23, 1821 John Keats died at the age of 25 under the care of his friend, the painter Joseph Severn, a half year after he moved to Rome for medical treatment for tuberculosis with Severn. He was buried in the Protestant Cemetery in a suburb of Rome, where P. B. Shelley and Severn also now lie. Keats asked Severn just before his death not to add any words to his own inscription, "Here lies One / Whose Name was writ in Water" on his tombstone. The epitaph of "writ in Water" has a sullen tone and there is also the unstrung lyre engraved on the upper side of his tombstone. Both of these apparently symbolize the tragedy of his lost fame and his sorrow due to his short life and the hostile criticism of his *Endymion*.

The design of the unstrung lyre and the epitaph also render a positive impression, however, in light of his relationship with his fiancée Fanny Brawne, and considering Keats's philosophy of "Negative Capability" that is the key to his poetic imagination. It might even be argued that the two elements of the broken lyre and the epitaph represent Keats's intention of making invisible things significant.

This paper will focus on the meanings of Keats's epitaph, or his last work, which is connected to his concept of "Negative Capability."

Keywords : John Keats, Epitaph, Lyre, Negative Capability

ジョン・キーツ 墓碑銘 豎琴 消極的能力

平成22年1月27日 原稿受理
大阪産業大学 教養部 非常勤講師

John Keats は、結核の療養のためローマのスペイン広場の一角に移り、その約半年後、友人の画家 Joseph Severn の看護もむなしく1821年2月23日深夜25歳4ヶ月という若さでついに事切れ、ローマのプロテスタント墓地に埋葬される。ここには、エアリアル号と呼ばれたヨットが嵐に沈み、Keats の没後約一年半の1822年7月に29歳で溺死するPercy Bysshe Shelley や、1879年に86歳の生涯を閉じる Severn も眠ることになる。そして、Shelley の墓石には、Leigh Hunt が選んだラテン語“Cor Cordium”（心の心）と Edward John Trelawny が William Shakespeare の *The Tempest* から引用した妖精 Ariel の歌う三行“Nothing of him that doth fade / But doth suffer a sea-change / Into something rich and strange” (1.2.400-02) が刻まれるが、Severn の隣に並ぶ Keats の墓石に記された“Here lies One / Whose Name was writ in Water.”（その名を水に書かれし者ここに眠る）は Keats 自身の言葉である。名前も入れず、文字はこれだけを刻むようにと、死の直前に Keats が Severn に頼んでいたこの銘は、悲哀に満ち夭折の無念さを漂わせるが、静かな響きがあり見る者の心を打つ。

そして、墓石の上部の、8本のうち4本の弦が切れた豎琴の浮彫が、一層物悲しさを誘う。Keats から豎琴のデザインを依頼された Severn が“to show his Classical Genius cut off by death before its maturity” (Rollins, *KC* 1:273) と言うように、弦の切れた豎琴が、早世と、*Quarterly Review* や *Blackwood's Edinburgh Magazine* から受けた不当な批評によって望みを絶たれたことを意味し、残らぬ名声と解釈できる墓碑銘の文字と呼応する。

それゆえに、Severn と親友の Charles Brown が、Keats の *Endymion* を酷評した批評家たちに言及した序の部分の後で添えて、最終的に、豎琴の浮彫の下に次のような形で文字が刻まれた。

This Grave
contains all that was Mortal,
of a
YOUNG ENGLISH POET,
Who,
on his Death Bed,
in the Bitterness of his Heart
at the Malicious Power of his Enemies,
Desired
these Words to be engraven on his Tomb Stone

“Here lies One
Whose Name was writ in Water.”
Feb 24th 1821¹⁾

しかし、この前置きの説明文は美しい豎琴のデザインや“writ in Water”のイメージを壊し、批評家への繰り言は否定的な印象を与える。実際、この序文を付け加えたことを Severn と Brown も後悔したようである。

それでは、早くから Severn に頼んでいた豎琴のデザインと、Keats が拘った“Here lies One / Whose Name was writ in Water.”という墓碑銘は、Keats にとっていかなる意味を持っていたのだろうか。本稿では、壊れた豎琴との関係に留意しつつ Keats の墓碑銘の真意を探り、永遠の眠りにつく際に託した彼の最後の願いについて考察する。

まず、豎琴の刻印に注目しよう。1820年2月に初めて咯血した時に死を予感したのか、同年5月までに、デザインを依頼された Severn がその豎琴の原案を Brown 所有の *Endymion* の本の3頁目に鉛筆でスケッチ²⁾したとされ (Ward, *K-SJ* 25)、現在ロンドン北部のハムステッドに在る Keats House に残っている。

この豎琴のデザインは、A.Ward の説³⁾にあるように、恋人 Fanny Brawne からの1818年のクリスマスの贈り物が弦の切れた豎琴を描いたシールだったことが深く関係すると思われる。このシールは文書のサインや封ろうとして当時流行していた“gem”と呼ばれた模造の宝石 (Jack 100-01) であるが、壊れた豎琴のまわりに“QUI ME NÉGLIGE ME DÉSOLE”（つれなくされて寂しい）というフランス語のモットーが書かれたその贈り物を Keats は愛用していたようである (Ward, *K-SJ* 24)。自作の数編の詩の入った *Literary Pocket Book* を贈られた Fanny も、1818年のクリスマスがそれまでで一番幸せだったと当時を振り返っている (Murry 33)。二人の関係が順調に進んでいたと思われるこの時期の思い出ならば、弦を繋いでほしいという Fanny の心情を秘めた壊れた豎琴のデザインが Keats にとって特別な意味を持つのは当然と言える。

また、この豎琴は、詩、音楽、予言などを司る美少年の神 Apollo が、Hermes から手

1) 墓碑銘の頭文字は、以下の引用についても墓石に刻まれた表記に従う。

2) このスケッチは、A. Ward, *John Keats: The Making of a Poet* (New York: The Viking P, 1963) のタイトルページにも載せられている。

3) Keats と Fanny の1818年のクリスマスプレゼントの交換や Fanny からの贈り物と Keats の墓石のデザインの関係については、A. Ward, “Christmas Day 1818,” *Keats-Shelley Journal* 10 (Winter, 1961) 21-25を参照。

に入れた古代ギリシアの lyre と呼ばれる楽器で、想像力と関係が深く、詩人の象徴である。たとえば、1816年夏にすぐ下の弟に寄せた詩、“To My Brother George” の中では次のように lyre と Apollo の歌という言葉を用いている。

Full many a dreary hour have I passed,
 My brain bewildered and my mind o'ercast
 With heaviness, in seasons when I've thought
 No sphery strains by me could e'er be caught
 From the blue dome . . .
 . . .
 That I should never hear Apollo's song,
 Though feathery clouds were floating all along
 The purple west and, two bright streaks between,
 The golden lyre itself were dimly seen . . . (1-5, 9-12) ⁴⁾

このように、ロンドンの喧騒の中では天上の調べが耳に届かず、想像力が鈍ってしまうと嘆く。しかし続く詩行で、“But there are times when those that love the bay / Fly from all sorrowing far, far away. / A sudden glow comes on them, naught they see / In water, earth, or air, but poesy.” (19-22) と、それでも詩的靈感しか見えないときがあると高らかに詠う。Apollo に恋され追われた Daphne が月桂樹に姿を変えて Apollo の木となったことを考えると、豎琴がかすかにしか見えなくとも、詩への情熱が醒めぬ限り、ポエジーが見えるということになる。

また、“Ode on a Grecian Urn” では次のように詠う。

Heard melodies are sweet, but those unheard
 Are sweeter; therefore, ye soft pipes, play on;
 Not to the sensual ear, but, more endeared,
 Pipe to the spirit ditties of no tone. (11-14)

4) 本稿で引用した Keats の作品はすべて、*The Poems of John Keats*, Ed. Miriam Allott (London: Longman, 1970) により、以下、行数のみを本文中の括弧内に示す。

ここでは笛の音に言及しているものの、耳には聞こえぬ音楽が魂に響くことが、延いては、音色を聞き取ろうとする姿勢が Keats にとって重要であることがわかる。

このように考えると、“writ in Water”という言葉に残らぬ名声と短命への嘆きのみを読み取るのは早計であろう。そこでまず、度々取り上げられてきた問題の、“writ in Water”が「水に」か、あるいは「水で」書かれたのかという二つの解釈について今一度考えてみよう。

この議論は Harrison S. Morris が初めて、F. Beaumont と J. Fletcher の合作 *Philaster* の “. . . all your better deeds / Shall be in water writ, but this in marble” (5.3.81-82) をその出典として指摘した (Morris 30) ことに始まった。王子が王に向かって、「良い行いはすべて水に書かれますが、これは大理石に書かれます」という箇所である。また Shakespeare と Fletcher の合作 *King Henry VIII* の中で、“Men’s evil manners live in brass, their virtues / We write in water.” (4.2.45-46) とある。これは、「人間の悪事は真鍮に刻まれますが、善事は水に書かれます。」という、王妃 Katherine への家臣 Griffith の言葉である。そして、Chaucer が *The House of Fame* の中では、Eneas の物語が一枚の“brass”に書かれていて (140-50)、また、著名人の名前が氷の岩に刻み込まれていながらもほとんど溶けて読めなくなっている (1128-47) という箇所もある。さらに、Plato は、Socrates と Phaedrus の対話集 *Phaedrus* で、Socrates に「まじめな内容は水の中に空しく書かない」(127) と語らせている。Keats は Socrates のことを、Jesus と同様、無私の心の持ち主であると、三ヶ月にわたる長い手紙の中で述べている (To George and Georgiana Keats, 14 February-3 May 1819)⁵⁾。Beaumont と Fletcher、そして Chaucer については、彼らの作品集が自分の机の上にあると同書簡の中で記していて、*Philaster* と *King Henry VIII* は、ロンドンの自宅に蔵書がある。Chaucer の“The Floure and the Leafe”という作品は、自身の“Written on a Blank Space at the End of Chaucer’s Tale ‘The Floure and the Leafe’”という詩の中で称え、その詩行を“Sleep and Poetry”のモットーに用いるほどである。Keats が尊敬してやまない Shakespeare は言うまでもなく、Plato や Chaucer を含め上述の作品すべてを Keats が読んで影響を受けた可能性は少なくない。

さらに、Shelley が“Fragment on Keats”の詩行で、Keats の墓碑銘を“HERE lieth One whose name was writ on water.” (1) と引用している箇所で、“on water”と表記し、「水上に」と理解していたこと、また、Keats の作、“When I have fears that I may cease

5) 本稿で引用した Keats の手紙はすべて、*The Letters of John Keats 1814-1821*. 2 vols. Ed. Hyder Edward Rollins (Cambridge: Harvard UP, 1958) により、以下、宛先人と日付を本文中の括弧内に示す。

to be”の中の“... I stand alone and think / Till love and fame to nothingness do sink.”(13-14)で“sink”という表現を使っていることから、「水で」ではなく「水に」であるように思われる。しかし、たとえ「水で」だと解釈したとしても、名声もしくは名前がすぐに消えるというイメージに変わりはないことを心に留めておくべきだろう。

ここでもう一度この墓碑銘を眺めると、“When I have fears...”の中で述べているように、無に帰するという言葉が鍵となっていると思われるので、次に“nothingness”に焦点をあてることにする。

Shelley の場合、たとえば、「無常」を詠う“Mutability”という二編の作の中には寂寥感がつきまとい、上島建吉の指摘にあるように、Keats を用いる哀歌、*Adonais* の特に最終連から、Shelley が Keats の死を「孤独で凄愴なもの」(323)であると捉えていたことがわかる。つまり、Shelley は永遠の世界と有限の世界との埋められない溝を嘆き、人間世界の限界を見て、無限なるものへの憧憬を抱くのである。

しかし、Keats の場合は、むしろ無を求めているように思えてならない。それは、彼の詩論の根幹に“Negative Capability”という境地や目指すべき“poetical Character”の姿があるからである。“Negative Capability”とは、“... *Negative Capability*, that is when man is capable of being in uncertainties, Mysteries, doubts, without any irritable reaching after fact & reason...”(To George and Tom Keats, 21, 27(?) December 1817)⁶⁾と二人の弟への手紙の中で定義するように、苛立つて事実や理由を求めず、不確かさ、不可解さ、疑惑の中にいられる能力のことで、Shakespeare が膨大に持っていた特質であると考えていた。“O thou whose face hath felt the winter's wind”という作の中でも、次のように、知識を求めないように呼びかけ、何もなくとも自分の歌が生まれてくると書いている。

Oh, fret not after knowledge—I have none,
 And yet my song comes native with the warmth.
 Oh, fret not after knowledge—I have none,
 And yet the evening listens. He who saddens
 At thought of idleness cannot be idle,
 And he's awake who thinks himself asleep. (9-14)

6) この手紙の日付については12月21日か27日かが不明であり、H. E. Rollins編の書簡集中の表記通りに記す。

しかし、ここで見落としてはならないことは、怠惰を嘆くものは怠惰であるはずがなく、眠っていると思うものは目覚めているという引用詩行の後半である。つまり、無、ないしは無の境地を意識しているのである。現実の諸相を知ることを前提として、そのまま実相を受け入れるという意味での消極的能力である。上島は“Ode on Melancholy”を引いて「この美も喜びも常に消滅の必然性を内在させていることに注意したい。重要なのはこの無常性、有限性の認識である。」(317)と述べているが、無常性を認める Keats と嘆く Shelley との決定的な違いがここにあると思われる。

そして、“poetical Character”については次のように述べている。

As to the poetical Character itself, . . . it is not itself—it has no self—it is every thing and nothing—It has no character—it enjoys light and shade; it lives in gusto, be it foul or fair, high or low, rich or poor, mean or elevated—It has as much delight in conceiving an Iago as an Imogen. What shocks the virtuous philosop[h]er, delights the camelion Poet A Poet is the most unpoetical of any thing in existence; because he has no Identity—he is continually in for—and filling some other Body. . . . (To Richard Woodhouse, 27 October 1818)

詩人はすべての中で最も非詩的なもので、個性がなく、それゆえに美醜を問わずあらゆるものになりうるという。Keats は、自らの短命を予期した手紙の中で、“... I feel my Body too weak to support me to the height; I am obliged continually to check myself and strive to be nothing.” (To J. H. Reynolds, 24 August 1819) と記し、身体が弱く高みに支えられないので、絶えず自分を抑制して、無になるように努めなければならないと述べている。元来無であったのではなく、無を目指したのである。無私、あるいは自己滅却の姿勢である。そして、“Negative Capability”の受容や“poetical Character”の可変性はまた、水が無色で、容れるあらゆる容器の形を取ることに通じ、その意味でも“writ in Water”に結びつくと言える。

ところで、当時の Keats を襲った不幸は病苦だけではなかった。認められぬ詩、Fanny への叶わぬ恋、経済的困窮に加え、同じ病に倒れた末弟 Tom の死、次弟 George のアメリカでのビジネスの失敗など、心痛は計り知れない。では、この苦境にあってもなお無に向かわせた強靱な精神力の基盤はいかなるものであったのだろうか。

それは、“That if Poetry comes not as naturally as the Leaves to a tree it had better not come at all.” (To John Taylor, 27 February 1818) と Keats が述べるように、無理に

形にするのではなく、詩は自ずと生まれるものであると考えていたからだろう。そして、義妹への手紙の中で“The worst of Men are those whose self interests are their passion—the next those whose passions are their self-interest.” (To Georgiana Keats, 13-28 January 1820) と記しているように、彼にとっては、あるべき人間の姿勢として、自我の抑制が不可欠であったということも念頭に置くべきであろう。

さらに、手紙の中で弟 Tom が少し喀血したことに触れた後でも、“Tom has spit a leetle (sic) blood this afternoon, and that is rather a damper—but I know—the truth is there is something real in the World . . .” (To J. H. Reynolds, 3 May 1818) と書いているように、彼のこの不屈の精神を支えたものは、失意の中にあってもなおこの世には真実があるとする、Keats の確固たる信念であろう。それゆえに、自らは無に帰して、他にゆだねることができたのである。“I perceive how far I am from any humble standard of disinterestedness—Yet this feeling ought to be carried to its highest pitch . . .” (To George and Georgiana Keats, 14 February-3 May 1819) と述べて、自分は無私の精神からはほど遠く、最高の高さにまで高めるべきだと、謙虚にわが身を省みた後で、次のように続ける。

. . . as Wordsworth says, “We have all one human heart” —there is an ellectric (sic) fire in human nature tending to purify—. . . I have no doubt that thousands of people never heard of have had hearts comp[ll]etely disinterested: I can remember but two—Socrates and Jesus By a superior being our reasoning[s] may take the same tone—though erroneous they may be fine—This is the very thing in which consists poetry

つまり、「. . . たとえ人間のまちまちな理性がどんなに過ちに満ちていようとも、その奥底には一つの音色が流れていることに気付くでしょう。そして、実に詩というものはこのことに気付くとき生まれてくるものなのです。その一つの音色から歌われるものなのです。そしてこのことを知るとき、人は『無私』の心を持つことができるのです。」(薬師川 490) という同書簡の要約にもあるように、Keats は、万人が“one human heart”を持ち、あらゆるものの中に調べがあると信じることで、人は「無私」の精神に到達できると考えていたのである。

“Negative Capability” の境地が人間性に対するこの絶対的な信頼の上に成り立つがゆえに、この精神が根幹に流れる彼の墓碑銘は美を醸し出しているのだろう。このように捉

えると、弦の切れた豎琴もまた特別な意味を帯びてくる。もはや弦は必要ない。壊れた豎琴から音色を聴きとってほしいという Keats の最期の願いなのではなかろうか。しかも、8本のうち半分の弦が切れているのは、緊張感と解放を象徴し、この点でも“Negative Capability”の精神に通じているように思われる。万物の実相を見据える洞察力と不屈の精神力を基盤とし、しかも自己を解き放ち、自らは無となることを目指したのである。それでも、戻ることのないローマへの往きの船上でその一年前の作に手を加えた、“Bright star! Would I were steadfast as thou art”の次の詩行には Keats の動揺が見える。

Bright star! Would I were steadfast as thou art—

...

No—yet still steadfast, still unchangeable,

Pillowed upon my fair love's ripening breast,

To feel for ever its soft fall and swell,

Awake for ever in a sweet unrest,

Still, still to hear her tender-taken breath,

And so live ever—or else swoon to death. (1, 9-14)

恋人の胸で星のようにじっと永遠に眠ることが叶わなければ死を求めるという詩行からは、Keats の悲痛な叫びが聞こえる。同時に、無や“Negative Capability”の境地とはかけ離れた“steadfast”や“unchangeable”という言葉には Fanny への断ち切れぬ真情も垣間見られ、共感を呼ぶ。死の床にあった Keats が、前述した Fanny からの贈り物のシール (Ward, *K-SJ* 25) をずっと手から離さなかったことを Severn は目撃していて、次のように追想している。

He kept continually in his hands a polished, oval, white cornelian, the gift of his widowing love, and at times it seemed his only consolation, the only thing left him in this world clearly tangible. (Sharp 91)

Severn が言うように、弦の切れた豎琴をデザインした“gem”は、Keats にとってまさに唯一の慰めだったのだろう。

そして、豎琴の刻印については死の一年近く前の英国滞在時に頼んでいたが、いまわの際に Keats が願いを託したものは墓碑銘であった。Keats の亡くなる約二週間前の1821

年2月14日に Severn が手紙の中で, “Among the many things he has requested of me to-night, this is the principal, that on his grave shall be this— ‘Here lies one whose name was writ in water.’” (Sharp 89) と記しているように, 墓石には「その名を水に書かれし者ここに眠る」とだけ刻むようにと Keats は Severn に指示している。Keats にとって, 名前や名声はもはや重要ではない。この墓碑銘は, 新たに伝える内容ではなく, Keats が終始目指した “Negative Capability” の精神を端的に表した最後の作品と言えよう。

もちろん, 次の手紙で明らかなように, 愛や美, 詩と同様, 名声への思い入れが強かったことも忘れてはならない。

As to what you say about my being a Poet, I can retu[r]n no answer but by saying that the high Idea I have of poetical fame makes me think I see it towering to high above me. At any rate I have no right to talk until *Endymion* is finished when done it will take me but a dozen paces towards the Temple of Fame (To Benjamin Bailey, 8 October 1817)

ここでは *Endymion* への自信と名声を求める Keats の姿が見受けられる。作品の中でも, まず, 先に引用した “When I have fears . . .” という1818年1月の詩の中で, 詩作と恋を全うできないかもしれないという恐怖に襲われる。また, 1819年3月に作ったと言われる “Why did I laugh to-night?” は, 生の苦しみと孤独を詠い, “Verse, fame, and beauty are intense indeed, / But Death’s intenser—Death is Life’s high meed.” (13-14) と締めくくるが, ここでも, 死を見つめながら, 詩と名声と美への魅力を吐露している。それから, 1819年5月作の “Ode on Indolence” の中では, “Negative Capability” の精神への目覚めを読み取ることができるが, “Shadows” あるいは “Ghosts” と呼びかける “Love”, “Ambition”, “Poesy” に別れを告げながらも, この三者への執着が断ちがたく, いやそれどころか, Keats の支柱であることを示す。さらに, 「名声について」と一般に呼ばれる二編の詩の中で, 名声を求めることの虚しさを訴えるが, 主題にしていること自体, 名声への拘りが感じられる。

しかし, 名声についての一編の詩の中で, “Fame, like a wayward girl . . . / Make your best bow to her and bid adieu— / Then, if she likes it, she will follow you.” (1, 13-14) と表すように, 名声は後からついてくるものだという考えに注目したい。つまり, 力を尽くした後は, 自身は無に帰して, 後世にゆだねるという姿勢である。それから, 再三触れた “When I have fears . . .” の詩行の, 「無に沈むまで物思う」という美しく静かな境地に “writ

in Water” という墓碑銘に通じるものを感じるのである。また、*Endymion* の中では次のように詠う。

Now, if this earthly love has power to make
Men's being mortal, immortal; to shake
Ambition from their memories and brim
Their measure of content, what merest whim
Seems all this poor endeavour after fame
To one who keeps within his steadfast aim
A love immortal, an immortal too. (1:843-49)

このように、名声、もしくは野心に優る地上の愛の力を Keats は信じていたのであり、この意味で、Keats の墓碑銘には大望を断ち切られたというより、自ら断ち切った感がある。

Fanny への手紙で “Love is my religion—I could die for that . . .” (To Fanny Brawne, 13 October 1819) と書いているように、Keats は、愛があれば目には見えないものでも伝わると信じていたに違いない。そうすれば、弦の切れた豎琴のみならず「その名を水に書かれし」という墓碑銘は、詩人の精神と作品が心の中に残るということを意味してはいないだろうか。その点でも、Severn と Brown が付け加えた墓碑銘の序文は、Keats の本意ではなかったと思われる。Shelley は *Adonais* の中で次のように Keats の死を悼む。

The nameless worm would now itself disown:
It felt, yet could escape, the magic tone
Whose prelude held all envy, hate, and wrong,
But what was howling in one breast alone,
Silent with expectation of the song,
Whose master's hand is cold, whose silver lyre unstrung. (319-24)

このように Shelley は、Keats の作品を酷評した批評家たちを非難したうえで、音色を奏でる Keats の手が冷たく、銀色の豎琴の弦が切られていると表現する。

しかし、実際 “the magic tone” は流れ、“silver lyre unstrung” は永遠に音を奏で、祈りにも似た彼の最後の願いは、切れた弦や “writ in Water” という文字を通して今も

響いてくる。John Curtis Franklin は次のように述べている。

When one can hear this ‘very tune of love’ (2:765), a physical instrument is no longer needed The ‘lyre unstrung’ stands for revelation which, against the ‘deadly yellow spleen’ (*Endymion* 2:917) of mortal existence, has come through poetry. Thus the broken lyre . . . revealed the evanescence of the artist’s medium, against the infinitude of his subject—Truth and Beauty. (Franklin 118)

このように、弦が切られることにより、Keats の詩と魂の音色は永久の命を与えられたように思われてならない。

Severn に墓碑銘についての遺言を託したとき、Keats はプロテスタント墓地を見に行くように求めた。Severn が William Haslam に宛てた手紙の中で、“Violets were his favourite flowers, and he joyed to hear how they overspread the graves. He assured me ‘that he already seemed to feel the flowers growing over him.’” (Sharp 93) と書いているように、堇の花が咲く美しい墓地であったことを告げると、Keats は喜びの表情を浮かべたという。聞こえぬ音色が流れ、見えぬものが心に届くにふさわしい場所であると確信し、安堵したと祈らずにはいられない。

(本稿は言語文化研究会第25回例会での口頭発表を加筆修正したものである。)

引用・参考文献

- Beaumont, Francis and John Fletcher. *Philaster*. Ed. Andrew Gurr. London: Methuen, 1973.
- Beck-Friis, Johan. *The Protestant Cemetery in Rome*. Malmö, Sweden: Allhems Förlag, 2003.
- Bertoneche, Caroline. “John Keats, Joseph Severn and the Fanny Brawne Episode.” *The Keats-Shelley Review* 15 (2001): 22-32.
- Chaucer, Geoffrey. *The Complete Works of Geoffrey Chaucer*. 2nd ed. vol.3. Ed. Walter W. Skeat. Oxford: Clarendon P, 1900.
- Franklin, John Curtis. “Once More the Poet: Keats, Severn, and the Grecian Lyre.” *The Keats-Shelley Review* 18 (2004): 104-22.
- Gittings, Robert. *John Keats: The Living Year*. London: Heinemann, 1954.
- Jack, Ian. *Keats and the Mirror of Art*. Oxford: Clarendon P, 1967.

- Keats, John. *The Poems of John Keats*. Ed. Miriam Allott. London: Longman, 1970.
- Lahr, Oonagh. "Greek Sources of 'Writ in Water'." *Keats-Shelley Journal* 21-22 (1972-73) : 17-18.
- Lowell, Amy. *John Keats*. 2 vols. London: Jonathan Cape, 1925.
- Morris, Harrison S. "Two Epitaphs." *Bulletin and Review of the Keats-Shelley Memorial, Rome* 2 (1913) : 30-32.
- Murry, John Middleton. *Keats*. 4th ed. London: Jonathan Cape, 1955.
- Palto, *Phaedrus*. Trans. and Com. C.J. Rowe. Warminster, Wiltshire: Aris and Phillips, 1986.
- Rollins, Hyder Edward, ed. *The Keats Circle: Letters and Papers and More Letters and Poems of the Keats Circle*. 2 vols. Cambridge: Harvard UP, 1969.
- . *The Letters of John Keats 1814-1821*. 2 vols. Cambridge: Harvard UP, 1958.
- Shakespeare, William. *The Tempest*. Eds. Virginia Mason Vaughan and Alden T. Vaughan. The Arden Shakespeare, 1999.
- Shakespeare, William and John Fletcher. *King Henry VIII*. Ed. Gordon McMullan. The Arden Shakespeare, 2000.
- Sharp, William. *The Life and Letters of Joseph Severn*. London: Sampson Low, Marston, 1892.
- Shelley, Percy Bysshe. *Shelley: Poetical Works*. Ed. Thomas Hutchinson, A New Edition, corrected by G. M. Matthews. London: Oxford UP, 1970.
- Ward, Aileen. "Christmas Day 1818." *Keats-Shelley Journal* 10 (Winter, 1961) : 15-27.
- . *John Keats: The Making of a Poet*. New York: The Viking P, 1963.
- Woodman, A. J. "Greek Sources of 'Writ in Water': A Further Note." *Keats-Shelley Journal* 24 (1975) : 12-13.
- 岡地嶺『英国墓碑銘文学序説』中央大学出版部 2000年。
- 加納秀夫『英国ロマン派の詩と想像力』大修館書店 1978年。
- 上島建吉「キーツ、シェリー、バイロン—死への船出—」『イギリス文学展望—ルネサンスから現代まで—』内多毅監修、杉本龍太郎他編 山口書店 1992年 pp.313-31。
- 五島正夫『イギリス・ロマン派の系譜—キーツ・ギリシア・ケルト—』文化書房博文社 1997年。
- 齋藤勇「キーツ墓碑銘考」『英語青年』第54巻第8号 1926年 pp.17-18。
- 谷眞嗣編注『愛の手紙—キーツ—』泉屋書店 1988年。

田村英之助訳『詩人の手紙—キーツ—』（「富山房百科文庫」5） 富山房 1977年。

出口保夫『キーツ—人と作品—』 白鳳社 1974年。

——訳『キーツ全詩集』 3巻 白鳳社 1974年。

薬師川虹一『イギリス・ロマン派の研究』 世界思想社 2000年。